

間もなく香上銀行のマネージャーから金子さんに呼出しがかかった。

さあ大変、店のコレスポンデンスの先生に上田という英語の巧い人がいたので通訳に出てくれといつたら、恐れてそんなとこへよう行かんと逃げ、金子さんは、お前さんは通訳するだけで何でもない、おこらる総領事が審理されるだろう。この人は日本でいうなら森有礼（当時最進歩的な有力議会政治家で文部大臣になり暗殺された人）のような偉い人だと聞かされて無事引退った。

この事件は神戸開港史上的著名なできごととして記録に残っていると金子さんから当時聞かされたが、年月も忘れ今はこれを探ねる手蔓もない。世は移つて開港百年目には盛んな祭典が行なわれ、米国へは吉田茂氏を長として財界の名士をもうらした使節団が派遣され、各地で賑やかなレセプションが催された。筆者も当時紐育にて、ピエール・ホテルで催された日米協会主催のバンクエットに数名の米人知己を招いて参加した。

この開港修好条約を結ぶためには攘夷派も開国派も多くの血を流し貴い生命を失つた。最近まで連続テレビショウ「花の生涯」が興味の的となつていたが、この大きな犠牲を払い國をゆるがせて得た条約は何物であつたか、金子さんと同じようなエピソードを探せば数限りなくあることだろう。

使節団の催はこの歴史的事実を記念するためか、外国に感謝するためだつたか、治外法権下居留地にどんなことが行なわれてきたかを知つてのことか……。

(Nissho Life Nov. 1964)

須藤欽吾

金子直吉の鉱山業への野望

三菱の佐渡金山、生野銀山、尾去沢銅山、住友の別子銅山、三井の神岡鉱山といった鉱山業が旧財閥發展の基盤とするに至る電機工業への本格的関心と進歩の機会を与えた。この鉱山業（非鉄金属製鍊を含む）を欠いたのが、鈴木倒産の一因だとする者もいるようだ。

抑々金子直吉は非鉄金属製鍊にも夙に関心を持ち、大正元年吉原重威を欧米に派遣し、亜鉛について調査をし、同年四月門司に大里製鍊所を建設、エイ銭の蒸留を始め、日本金属を創立し、彦島製鍊所として発足した。他方徳山に焙燒炉を建設して焼鉱を彦島に送り始めた。

次いで彦島に蒸留工場を増設して彦島を亜鉛蒸留大工場にしたが、第一次大戦休戦の余波で全面休業とした。にも拘らず亜鉛への魅力は失えず、大正十一年には彦島に新式レトルト炉を新設。十三年まで増設を続けた。然し昭和三年遂に彦島を三井に渡すこととなつた。

このような鉱山業一株に亜鉛への関心の深さは、有名な天下三分の書の中にも次のように記されている。

「銅、亜鉛等の製鍊事業を開始したるに甚だ好結果也。即ち銅は支那の古錢その他古金類を分解、亜鉛と銅を得るあり、亜鉛と鉛は口シヤ、豪州より鉱石を取寄せ、之を製鍊しつつあり。

この事業に対しても有益な報告と知識を与えられんことを望む」

亜鉛の他にも銅に手を出し、大正四年杉山氏より日比製鍊所の經營

を受け継ぎ、浅田長平を起用せんとしたようだ。同時に六口島も計画といつたように、設備の革新とともに、瀬戸内沿岸各地の銅鉱石等を手当たり次第買鉱と存立を図つたが、現在はタンクステンの瀬戸田、モリブデンの大東が太陽鉱工に残つてゐるのみのようだ。

鈴木商店没落の原因是、台湾銀行の新規貸出し中止にありと、金子

直吉は片岡藏相（土佐人・関西財界の重鎮）に泣きついたが「立場上銀行に対して貸出しの指図は出来ない。況や誰に貸してやれなどと命令出来るものではない」とことわられている。片岡はまた、恐慌の遠因として、日本の不自然の好景気に我が國の朝野は放漫な施設をした上、大戦後計画の整理、収縮を図るべきであつたと苦言を述べている。

金子も大戦終了を後藤新平の私語らより察し、退却を考えたようだが、社内の統制力を失っていたため、徹底出来なかつた。勿も當時鈴木商店内は、学卒派、土佐派と分かれていたが、何れも優秀な人材が群雄割拠の状態で、金子自身の人を大切にする考え方が仇になつたようだ。生産が人間の一番楽しい仕事であるとの彼の信念はずつと変らず、お蔭で事業と人とは残つた。今日の瀬戸内工業地帯隆盛が起つたことは「関門と阪神の海岸を鈴木のマークで埋める」との彼の夢の変形とも考えられよう。

然し彼の鉱山業への野望の一端は「商売の基礎は工業にあり」と、現在の太陽鉱工や東邦金属等に脉々として伝えられていることを忘れてはなるまい。



尚亞鉛の学術的研究と戦後の工業隆盛に貢献された東大小川芳樹先生（日本で最初にノーベル賞を受賞された湯川秀樹先生の長兄）は、筆者東北大学在職中（第二次大戦前后）格別の御指導をいたいだだけに、この業界の沿革を辿ることは感無量なものがあります。

本文起草の切つ掛けは、日本学術振興会第六九委員会「非鉄金属製鍊技術の伝承の調査研究成果報告書」（平成十七年三月）によるもので、本書を御恵送下さった東大増子、阪大幸塚、千葉工大山下の諸先生のご好意に深謝します。